てがみ座　第十六回公演

燦々

さんさん

作　長田育恵

Tegami-za

■ 登場人物

お栄	北斎の娘・絵師
葛飾北斎（本名 鉄蔵）	江戸一番の大絵師
池田善次郎（画号 渓斎英泉）	絵師、北斎宅の居候
西村屋与八（屋号 永寿堂）	版元 西村屋永寿堂の店主
小兎（こと）	北斎の妻、お栄の母
堤等明	お栄の夫・生業は油屋
魚屋北渓	北斎一門の高弟
おみね	北斎工房の隣家のおかみ
祥吉	西村屋摺師、与八の親戚
しのぶ	江戸三美人の一、両国の煎餅屋の娘
辰（たつ）	おみねの夫、夜泣き蕎麦の屋台
川原慶賀	オランダ商館、シーボルトお抱え絵師
霧里	吉原遊女・花魁
夕霧	吉原遊女・瘡持ち
滝野	吉原芸者、善次郎の妻となる
冨士屋嘉兵衛	吉原遊郭「冨士屋」妓楼主
読売1	かわら版売り（大ムカデ）
読売2	かわら版売り（吉原細見）
読売3	かわら版売り（シーボルト到着）
夜鷹	等明に買われる女
善次郎に似た男	「冨士屋」で女を買う客
遊女	「冨士屋」遊女

ほか　行商・街の人々・蕎麦屋の客・遊女・吉原の客など……

一　初夜

橋本町にある、堤等明の家（生業は油屋）。祝言の夜。
等明（三代目堤等琳の門人）とお栄（葛飾北斎の娘）の婚儀。
食事は済み、客は散会している。
あとに版元の西村屋与八が残り、等明と酒を酌み交わしている。
お栄、座敷の片隅で墨を摺っている。

与八　すっかり馳走になったね。
等明　もう一本つけましょう。（酒）
与八　いや、これ以上長居しちゃ野暮の骨頂。退散します。
等明　西村屋さん、この度は本当にお世話になりました。
与八　なに、あたしも長年版元をやっちゃあいるが、いいご縁を取り持てました。
堤等琳門下、堤等明。葛飾北斎の娘、お栄。いい祝言でした。
等明　ですが北斎殿はいらっしゃらなかった。
与八　退屈なんですよ、あの人は下戸ですし。なあ、お栄？

墨を摺っていたお栄、顔を上げる。

等明　そうはいっても娘の祝言に、
お栄　おやじどのは興味ねえよ。ただでさえ自分が家移りしたばっかしで、楽しいんだろ。
等明　……、
与八　気兼ねするこたない、おかみさん――小兎さんも、数いる男の中からあんたを選んだんだ。見どころがあるってね。
等明　本当ですか？　ちょうど明日の席画会にいくつか下絵を描いてたんです。どんな画題を出されたっていいように、（絵を見せようと出すが）
与八　（見ずに）ああ、それは楽しみに取っとこう。お栄、あたしゃ帰るけどね、おとッつぁんに言付けはあるかい？
お栄　ねえな。あ、油があるんだ、持ってっとくれ。
与八　そりゃあるだろうさ、ここんちは油屋なんだから。おあし払うよ。
等明　持ってってください。俺が息子になったからには、北斎殿には金輪際、油の苦労はさせません。
お栄　助かるよ。おやじどのは夜通し描くから。あんたと祝言上げてよかった。
与八　言うねェ。
等明　西村屋さん、俺はやります。断然やりますよ。手始めに明日の会、これからは北斎の息子として盛り立てますから。そしていつか北斎を越える。

与八　ヨッ、漢だねェ。
お栄　べんちゃらはもういいよ。（墨を摺り続け）
与八　いや、楽しみだ。人は所帯を持ちゃ変わると言いますからね。絵師ならばなおのこと、これから一体どう化けるか。――それじゃおふたり。つつがなく。

西村屋、去る。
墨が擦り上がるお栄。筆に墨を含ませる。
等明、掻い巻きを引き寄せる。

等明　やっと、ふたりっきりだな……。来いよ……。
お栄　……。
等明　なあ。紅、ぬぐっちまったのか？
お栄　……。

お栄、心を固め、紙に最初の筆を落とそうとするところ、

等明　お栄……、
お栄　あ。何しやがる、台無しじゃねえか！　――ま、いっか、
等明　待てよ、何してる？
お栄　（続きを）
等明　絵なら俺が描いてやる。
お栄　あんたが描いたって仕方ねえだろ。あたしが描きてぇんだから。
等明　初夜だぞ？　もっとこう――こう……そうか、怖ェのか？
お栄　……。
等明　そうなんだろ？
お栄　誰が怖ェんだ。まぐわいなんて飽きてンのに。
等明　えっ？
お栄　赤ん坊の頃からおとッつぁんがまぐわい描くの、何千、何万、見てきたんだよ。あたしだって十（とお）の頃には手本見ながら描いてた。
等明　それは――それ――おめぇ自身は……シてるのか？
お栄　飽きてるもんに興味ねぇよ。
等明　シてるのか？　シてねえのか？
お栄　ただ、生の手本の生写し（しょううつし）なら興味あるな。……あんた、
等明　ちょ……明かり消すか？
お栄　だめ。そんなことしたら、見えねえ……。（着物を剥ぐ）
等明　ぬあっ！

お栄　見せて。下。
等明　待て待て待て。
お栄　見ちゃいけねえの？　いいよな？
等明　やめやめ――いったんやめ！　なんなんだおめぇは！
お栄　……。
等明　まず筆、離せ！　なんなんだ！
お栄　……。
等明　おめぇ、まだ北斎の娘のつもりか？　いいか、おめぇはもう俺の女房だ。おめぇの主は三千世界に俺一人。俺のために飯イ作って繕って、俺の帰りを待ってりゃいい。もう絵筆なんぞに用はねえんだ。
お栄　（溜息）はあ――――――。
等明　一緒になりてぇって言ったよな？
お栄　誰が。
等明　おかみさんからそう聞いた。
お栄　そりゃあんまりうるせぇから。どうせ嫁ぐなら絵師がいいって言っただけ。
等明　あんたのことはおっかさんが気に入ってた。油屋だから。
お栄　堤等琳門下、堤等明だ！
等明　蛙だろ。
お栄　何、
等明　井の中の蛙。それもたいした自信家だ。西村屋のおっちゃんは、ああ言ったけど、ほんとは縁談断らなかったのあんただけだよ。他の連中は、あたしが炊事も洗濯もからっきしだって分かるとヨソへ行った。あんただけなんだ。明け透けに、北斎を欲しがったのは、
お栄　もういい。一度すりゃ情も湧く。

お栄、等明から逃れる。その先に、等明が出していた下絵。

お栄　これ、あんたの絵？
等明　――、
お栄　（笑う）
等明　笑ったな。
お栄　だってこれ――こんなんで？　あのな、北斎の名が欲しけりゃ金出せば？　おやじどの、金さえ貰えりゃ画号を売るよ。素人にもさ。
等明　黙れ、
お栄　こんなんで何が北斎を越えるだよ。
等明　北斎とて人の身だ。どう足掻いても今が絶頂、齢六〇を越えりゃ、人生もう

お栄　仕舞ェなんだ。おめぇこそ目ェ背けてやがる。北斎は、もう終わる。
等明　――馬鹿すぎて、つける薬がねえ。
お栄　黄昏だ、この先は。下り坂をヨイヨイ歩いていくしかねえ。
等明　言っとくがおやじどのはあんたよりずっと若ェよ！
お栄　なに声上げてンだ？　図星だろ？　北斎も死ぬんだよ。
　　ふざけんな。おやじどのは黄昏る気なんて、これっぽっちもねえよ。油屋の片手間でやってる町絵師風情が、おやじどのを語るんじゃねえ！　おやじどのは違うんだ、なにもかも。ちょっと線を描けばすぐに魂が宿る。猫は紙から逃げ出してニャアと鳴くし、魚は跳ねて飛沫をあげる。あんな絵師はふたりといねぇ！　どう足掻いても届かねえ。
等明　（じっと見ていた）――おめぇ、まさか絵師になりてぇのか？
お栄　……、
等明　こいつァ面白ェなあ。ちぃっと筆を持たされてきたからってな。町絵師風情で悪ィが少なくとも俺ァ絵師だよ。俺の名前は世に出てる。けどな、おめぇは女だ。
お栄　――、
等明　可哀想にな。俺が教えてやる。

　　等明、お栄を力づくで抱き竦める。暗闇で揉み合う二人。
　　どうにか逃れるお栄、着物ははだけ、等明の唇から血が出ている。

お栄　知ってんだよ、ンなことは！　でも描きてぇ。描きてぇんだよ……！

　　ジャン――遠くから響く半鐘の音。
　　お栄、筆を掴み、立ち上がる。

等明　おい、行くのか？　待てよ、初夜だぞ？
お栄　（一瞥するが）――。
等明　行くな。お栄――お栄！

　　お栄、すでに走り出し、夜に消えた。

二　火事場

　　ジャンジャンジャンジャン――烈しく掻き鳴らされる半鐘。
　　火事場は近い。
　　逃げ惑う人々、見物衆。威勢良く辺りを打ち壊す火消し衆。

人混みを掻き分けて、お栄が走ってくる。
少しでも高いところに登ろうと、目を走らせる。
ふと男を見つける。北斎宅に居候している善次郎（渓斎英泉）。

善次郎　おう。
お栄　善次郎。
善次郎　来たな。
お栄　来るさ。
善次郎　あそこにいいのがある。登るぞ。

善次郎、家に梯子を立てかける。

善次郎　先行け。

お栄、着物の裾をからげると、善次郎が押さえる梯子を登る。
続いて善次郎も登る。

善次郎　見えるか？
お栄　ああ！　火がまるで生きてるみたいだ。何色で描く？
善次郎　辰砂（しんしゃ）。
お栄　蘇芳（すおう）。
善次郎　深紅（しんく）。
お栄　緋（あけ）。
善次郎　紅（べに）。
お栄　猩々緋（しょうじょう）。
善次郎　金泥（きんでい）。
お栄　銀泥（ぎんでい）。
善次郎　すげぇ色だな。
お栄　ああ。綺麗だ。

群青の夜の中、燃え上がる炎。人々の姿を炎が照らす。

三　父と娘

文政六年（１８２３年）、初夏。
大川（隅田川）のほとりの本所。北斎工房。
家移りしたばかりの家だが、早くも部屋は足の踏み場もない。

部屋には、紙や絵具、食べ物の残りなどが散乱している。
部屋の柱に打ち付けた蜜柑箱。そこに収められているのは日蓮像。
紙と塵との隙間に、埋もれるようにして丸まっている背中。
葛飾北斎が絵に向かっている。

北斎　（描く手を休めず）――オイ。……オーイ！　……オーイ！

北斎振り返る。室内に誰もいないことを思い出す。

北斎　……そうだった。

北斎、紙の山を掻き回し始める。が目当てのものは見つかない。

北斎　（苛々し）……どこだよ！？

祥吉（声）　こんにちは。北斎工房はこちらでしょうか。

北斎　入れ。

西村屋の摺師　祥吉、版下画と饅頭、お栄からの油を持ってくる。

祥吉　失礼します。（汚い！）……あの……すみません……北斎先生？

北斎、紙の山から顔を出す。

北斎　なんだ。

祥吉　！　北斎先生でいらっしゃいますか。西村屋でございます。

北斎　西村屋？　与八はどうした？

祥吉　主人はただいま席画会に出ておりまして。済み次第こちらへ伺うと。

北斎　新顔だな。

祥吉　祥吉と申します。あたしは与八の親戚筋にあたり、故郷で十年、摺師の修行をしておりました。このたびようやく出て参りました次第で。

北斎　ほう。やがてはテメェが俺のを摺るか？

祥吉　願わくば。本日は墨刷りが上がりやしたんでご挨拶かねがね。こちらです。色のご指示をお願いします。

北斎　取り込み中だ。あいつにやらせる。オーイ、

祥吉　（間）……どなたか？

北斎　いや。

祥吉　あの――工房の皆さまは？　北斎先生はまさかお一人で？
北斎　必要がありゃ呼ぶさ。手分けも出来る。
祥吉　でも雑用は……、
北斎　いるにはいたがな――いい、色は考えとくから明日また来い。
祥吉　ありがとうございます。（動かず）
北斎　なんでェ。帰ってよし。
祥吉　その……いただくものを……。
北斎　あーーーじき出来る。じき出来るんだが――捜し物だ。あれだ、その辺にあるんだよ。お前も探せ。
祥吉　何を？！　何を探せばよろしいんです？
北斎　見て分かれ！　それで俺のを摺ろうなんざ、
祥吉　ええ？！――刷毛ですか？　糊？　筆？！　印章がこんなところに！
北斎　テメェ、何見てやがる？　節穴か？　おめェのオメメは飾りかよ？
祥吉　すいません！　何を探せば――フンドシですかァ？！
小兎　なにやってんだい？

戸口に、小兎（こと）現れる。

祥吉　お客様でしたか！
北斎　客じゃねぇ。カカアだ。
祥吉　これは。お初にお目に掛かります、あたしは西村屋の摺師で祥吉と、
北斎　挨拶はいい。
小兎　小兎と申しますよ。
北斎　顔出すなんざ珍しいじゃねぇか。
小兎　ちょいと話があったんだけど。出直すよ。
祥吉　いえ！　外すならあたしが。――お茶淹れて参ります。
北斎　茶だぁ？　茶ッ葉はねえぞ。
祥吉　お隣で分けていただきます。紅梅堂の饅頭をお持ちしたんです。
北斎　早く言えよ。
祥吉　それから油も。ゆうべ、お栄さんから主が言付かりまして。
小兎　まあそう。そうなの。ありがたいねぇ、あんた！
北斎　……。
祥吉　お茶、淹れてまいります！

祥吉、土瓶を持って出ていく。

北斎　濃く淹れんな。ほんのりだ。
祥吉（声）　はいィ。
小兎　お栄から油だってさ。油屋の若女将になったんだねぇ……。
北斎　（泣くかよ）
小兎　おまえさん、分かってるね？　あの子はもうこの家のものじゃない。うちの敷居、跨がせるんじゃないよ。
北斎　敷居ぐらいいいだろ。
小兎　あたしゃ見たんだよ。あの子、嫁入り道具に画材を詰めてたからね。臍曲げると面倒だからそのままいかせたけど――おまえさんの責任だからね。ちゃんと思い切らせてやっとくれ。
北斎　別になんとも思っちゃねえだろ。
小兎　まだ這い這いしてたあの子に絵筆握らせたのは誰だい？　今から思うと、あの狂歌本、あれが全部いけなかった。
北斎　狂歌本？
小兎　ほら、あの子が十かそこいらの頃！　帆掛け船の絵を挿絵に載せたろう。
北斎　ああ……描けてたからな。
小兎　江戸中の絵師の中から、たった一六人選ぶ中に、あの子を入れた。おまえさんは面白がって載せたんだろうけど、あの子は違う。刷り上がりの本抱いてぎらぎらしてさァ。思ったよ、この子の人生、狂っちまった。
北斎　そんなかよ。
小兎　そんなさ朴念仁！　唐変木！　このすっとこどっこい！
北斎　……。
小兎　いいかい。お栄だけなんだ。お美与もお鐵（てつ）も早くに死んじまった。末のお猶だってあの弱さじゃ十まで生きられるかどうか。お栄だけが生き延びて人並みの幸せを掴めそうなんだ。
北斎　……ピーチクパーチク、
小兎　過ぎた望みは身を灼くんだ。あの子を解放してやっとくれ。
北斎　ツバクロだな。（軒に巣）
小兎　（ヤレ紙を投げつける）
北斎　あ、テメ何しやがる。
与八（声）　しっかりしなさいよ。もうちょっとだよ！

与八、酔った善次郎を抱え、入ってくる。

与八　北斎先生、失礼しますよ。
北斎　おう。でけぇ荷物だな。

与八　席画会でお会いしましてね。今はこちらへ居候してると聞きましたので。
善次郎　ただいま師匠。あら、女だ。女がいる。
小兎　あたしだよ、善さん。
善次郎　なんだ。（寝る）
小兎　なんだじゃないよ！　水飲んで。
与八　おかみさん、昨日はどうも。いい祝言でした。
小兎　西村屋さん――なんてお礼を言えば。おまえさんも、ほら。
北斎　与八、腹減った。
小兎　おまえさん！
与八　今の時分なら鮎が旨い。塩焼き、届けさせましょう。
小兎　何から何まで……。
与八　あたしたち版元は絵師あっての商いですからね。頼られるのが、ありがたい。
北斎　蟻が鯛なら芋虫や鯨、と。（アリがタイならイモムシャクジラ）
与八　第一、お栄ちゃんはこんな時分から見てましたからね。先生の膝の上で、ちいちゃい手で絵の中の金魚、掴まえようとして――お寂しいでしょう。
北斎　恐れ入谷の鬼子母人。
善次郎　（いびき）
北斎　……何でぇ。このマグロは。
与八　例の如く、吉原からその足で席画会に来ましたからね。ゆうべもさぞ。それに今日の席画会じゃ、この人の独壇場、文句なしの一等でしたから。
北斎　画題は？
与八　『十開』です。十界は十界でも仏の教えじゃありません。男と女のナニのこと、
祥吉（声）　堪忍してください、今はちょっと、
おみね（声）　待ちなさい、逃げんじゃないよ！

祥吉、逃げて来るところ、隣家のおみね、箒を手に追って来る。

与八　祥吉ぃ、
祥吉　旦那さん！
与八　なにしでかした？
祥吉　あたしじゃありません！
おみね　ちょいと。ここんちの家主は誰だい？　隣のみねってもんだけど――、
善次郎　女。（夢うつつ）――女だ……。
おみね　！　なんだよあんた、
善次郎　（匂いを）……、

おみね　ちょっ、なにして――あッ――アッ、

善次郎、おみねを抱きすくめ、感触を楽しむ。
嫌がるおみね、だが巧みな善次郎に息が上がってしまう。

与八　ああ、ちょうど、こんな具合でしたね。地獄・餓鬼・修羅・人界（にんかい）・天界、さいごは昇天、夢心地。

おみね　ア、ハァ、アンッ！　――やめろ！

善次郎　ふぁ？（目覚め）

与八　この助平！　なんなのさ！

善次郎　善さんや、ここは吉原じゃないんだよ。北斎先生のお宅だ。

夢……？　厠……。

善次郎、出ていく。

おみね　ひどいじゃないの。あんまりだよ。

小兎　おみねさん……、

おみね　お宅、移ってきてからこっち挨拶も来ないしさ。屋根の上に貝だの石だの並べてさ。風吹くたんびこっちに降って来るんだよ、さっき障子に穴開いたよ。

小兎　ほんとにもう……、

おみね　なんであんなの並べてんのさ。

祥吉　絵具を作るためかと……、

おみね　ワケ聞いてんじゃないよ、あんたは障子張り替えてきな。

祥吉　えぇ？！

おみね　お宅が隣じゃ、おちおち眠れないんだよ。長屋みんなが迷惑するんだ。出てっとくれ！

北斎　嫌だね。

ヌッと出て来る北斎。絵筆で軒先や鴨居を指し示す。

北斎　ツバクロ――蜘蛛の巣――まだ描けてねぇ。

おみね　……ハア？！

北斎　蜘蛛の巣は、西日がちょうど当たンだよ……糸に当たる、光の滴（しずる）……ツバクロの巣も、いろんな草や藁や泥を使ってやがンだ……その質感、羽毛の艶めき……。

おみね　……だから何？　汚いから蜘蛛がいるんだろ？　掃除しなよ。

おみね、箒で蜘蛛の巣を払おうと。

北斎　触るな！

おみね　！！

与八　あいすいません。この人は絵師なんですよ。当代一の葛飾北斎。

おみね　葛飾……北斎？　ええ……？　馬琴の『水滸伝』、挿絵で読んでたわよ。

北斎　奴の名は二度と出すな。

与八　で、さっきの色男は、男女のあぶな絵を描かせたら当代一の渓斎英泉。

おみね　え、『枕文庫』の？　アラ……やだよう。

与八　ご迷惑お掛けしますが、なにせ研究熱心なゆえ。どうかコレで障子を張り替えてくださいまし。（金を）

おみね　……そう、そうなの？　あたしは、どっちかっていうと、嫌いじゃないし。

与八　でも、長屋の連中は……、

おみね　内緒ですがね――今日は新しいホンのための集まりなんです。

与八　へえ？

北斎　こちらにおわす葛飾北斎。渓斎英泉。それに、他にも随一の絵師を集めて、

与八　極上の笑い本を作ろうと。

祥吉　まあ。ワ印。

題はそうさな……『艶本　多満普求梨』。（えほん　たまふぐり）

与八、そりゃ。

そうです。これが今日ここへ伺った本題ですよ。なあ祥吉。

西村屋永寿堂、つぎの屋台骨を見込んだ本です。近頃じゃ阿蘭陀（おらんだ）だの英吉利斯（えげれす）だの異国船もうるさいですから、いつまたお上の取り締まりが始まるかもわかりません。ですから今のうちに。まずは大判錦絵を一二枚組。あたしも摺らせていただきます。

与八　世間の話題を引っさらうものを作りたい。渓斎英泉なら、席画会でも大金星の男と女の十開図。北斎先生には、いつかの、誰にも真似できない――大蛸とからみあう海女のような。

おみね　あの絵！　あれね！　吸盤が吸いついてんのよね。小蛸もいてサ……。

与八　世に出れば真っ先にあなたに差し上げますよ。ですから長屋の皆さんには、

おみね　分かった。あたしがよっく話しときます。

小兎　ありがとうございます。

おみね　ね、他には？　どんな絵師が描くんだい？

与八　なんせ極上のワ印ですからね。相当力のある絵師を揃えます。先生の御一門からは魚屋北渓（ととやほっけい）さん。あとはまだ決めておりませんが、

お栄　あたしはどうだい？

戸口にお栄がいる。

お栄　極上のワ印、あたしも描きたい。
小兎　お栄――あちらの店番は？
お栄　愛想笑いできねぇなら邪魔だって言われた。それに、おやじどのが困ってんじゃないかってさ。
北斎　困っちゃいねぇよ。
お栄　ワ印なら、ゆうべ眠れなくて、描いてたんだ。見てくれよ。

お栄が懐から帳面を差し出す。その絵。

与八　……ああ、これは。（北斎に）
北斎　……（無言で見ているが、おみねに）おう、
おみね　えっ？！（見るが）……これを嬢ちゃんが描いたの？
お栄　――。
おみね　すごいねえ……。
お栄　（嬉しく）
おみね　すごいけど……なんともない、
お栄　なんともない？
おみね　ほら、北斎さんのあの蛸の絵見るとさ、あたし……なんか、ジワッと来るんだよ。海女さんが蛸に吸われてヒイフウ言ってる……まるで、あたしの肌にも吸盤が這うような。蛸の吸い口が奥まで来るような……火照っちまうっていうの？　その点、嬢ちゃんのはさ、まあ、うん。
お栄　――、
おみね　や、すまないね、あたしなんて素人だからさ。とっても上手だよ。
与八　ありがとう、おみねさん。良く分かったよ。
おみね　そ、そんじゃあたし、屋根片づけてくるよ。貝殻干すなら屋根じゃなくていいんだろ？
お栄　――それ、あたしが干したやつだ、
おみね　籠あげるよ。そんで、風の通り道に干したげる。
祥吉　おみねさん、あたしが屋根に登りますよ。
おみね　当然だよ。
祥吉　へい。

おみね、祥吉を伴い出ていく。

北斎　ウンともスンとも言いやがらねえ。おめぇが描いてるのは、ただの線だ。絵面も趣向も歌麿の引き写し。

お栄　……ワ印の絵面なんて、全部引き写しじゃねえかよ、

北斎　そこに、どんな肉と熱を入れ込むかッてぇのが腕の見せ所じゃねえか。

お栄　……さっきの人が言ったから？　あの人に絵が分かるかよ？

与八　けどね、あの人たちですよ。絵を買ってくれるのは。つましい生活の中、日々の小銭をやりくりしてね。

お栄　なんで――急にそんな……描けてるって言ってたじゃねえか。

北斎　十のガキならな。

お栄　……、

北斎　ペラッペラだ。

北斎、お栄に帳面を投げる。

小兎　帰ンな、お栄。（小銭を握らせ）これでね。等明さんに晩のおかず買って帰りなさい。台所ができなくても、味噌汁（みつけ）だけはあんたが作って。

お栄、帳面を拾い、出て行こうとする。

北斎　あ。アレがねぇんだ。おい。

お栄　――、

北斎　オイ！　あれがねえんだよ、どこだ？

お栄　あれって。

北斎　あれはあれだ。

お栄、北斎の描くものを覗き込む。
家移りの荷物に入ったままの絵を出してくる。

お栄　……これかい？『ねがひの糸ぐち』。比べて見たいんだろう？

北斎　おう。――見てみろ、歌麿の野郎、親指を外に広げてやがる――足指の先までつぼめたほうが切ながってイイに決まってんだろ？　与八、描いちまわァ。

与八　はい。

北斎　オイ。帰っていいぞ。

井戸端で顔を洗ってきた善次郎、戻って来るところ、

お栄　——おやじの莫迦野郎！

善次郎　うおっ。

お栄、北斎に小銭と帳面を投げつけ、出て行く。

小兎　お栄！

小兎、銭を拾って追いかけていく。

善次郎、お栄の帳面をめくって絵を見る。

善次郎　——描いてんなァ。

北斎　面白かねえよ。

善次郎　そりゃ師匠と比べりゃな。

与八　男の体を知れば、化けると思ったんですが。

善次郎　……こんだけ描いてて、一枚も画号が入ってねえや。

与八　画号はまだ、師匠が許してないからねェ。

北斎　……、

与八　気になることが一つ。等明さんのことです。今日、席画会でご一緒だったんですがね……。

善次郎　ああ……もういいじゃねえか。ありゃあ駄目だよ。絵なんぞ諦めて家業に精出しゃいい。

与八　このまま二人、油屋に収まっちまいますか。ねえ、先生？

北斎　——、（帰れ）

与八　はいはい。それじゃ明日また絵をいただきに参ります。失礼しますよ。

与八、出ていく。

善次郎　……ゆうべ、あいつと会ったよ。

北斎　……、

善次郎　真夜中に火事あったろ。あいつ、いつもみてェに裾ひっからげて火事場に来てた。等明んとこから何町も走ってさ。俺たち一晩中、火の粉が空に消えるまで、一緒に見たよ。どうやって描こうか、何色も思案して。あいつ、色が足りねぇ、足りねぇって悔しがるんだ。描きてぇ色があるんだって。お栄は——なんで女に生まれちまったかね？

北斎　くだらねえ。どう足掻いても、てめぇはてめぇにしかなれねぇよ。てめぇになるしかねぇんだよ。

善次郎　……へへ、

北斎、自分の絵に向かい続けている。

善次郎も、自分の絵に向かう。ふたり、次第に没頭し――。

四　欲

賑わう橋上。人々が行き交い、交差する。

行く者、去る者、その場に留まる者。そして色とりどりの行商の声。

魚売り　あじ、あじっ、とんびょん（トビウオ）。あじ、あじっ、とんびょん。

唐辛子売り　とんとんとんがらし、ヒリリと辛いは山椒の粉、アッ、スハスハするのは胡椒の粉、アッ、胡麻の粉、芥子の粉、陳皮の粉、仲が良いのは娘ッ子。とんとんとんがらし、とんがらしは辛いよッ。

冷や水売り　ひゃっこい、ひゃっこい、ひゃっこいよ……、

（など）

お栄、橋の上に来る。人混みの中、ぼんやりと。

お栄　（川を）――、

北斎の高弟、魚屋北渓が来る。

北渓　――お栄か？

お栄　！　北渓のアニさん、

北渓　橋本町に越したんだろ？

お栄　おとッつぁんの様子見に来て――でも、いらなかったみたい。

北渓　師匠は、まあ、テメェの絵しか見てねぇからな。いなけりゃいねぇでいいし、いるなら、猫の手だって使う。

お栄　そうだな。

北渓　元気ねぇな。そうだ、祝言の祝い何がいい？　兄弟子になんでも言ってみな。

お栄　いらねえけど――そんなら、アニさんの絵が欲しい。

北渓　おう。何描いてほしい？　花なんかありきたりだから、鬼なんかどうだ？金時が小鬼踏みしめてバーンとしてんだ。まず胡粉を塗って――上から肉筆の大傑作、仕上げに金泥をバーッと――どうだ、縁起よさそうだろ？

お栄　豪勢だな。……なあ、アニさんはなんで絵師になったの？

北渓　なんでェ、藪から棒に。
お栄　アニさん、松平の殿様に魚届けてたんだろ？
北渓　そんでも魚屋は魚屋だ。それ言うなら善次郎だろ？　元は二本差しの身分だったって言うぜ？
お栄　絵のために身分を捨てた。
北渓　まァ、あいつも、頭よりコッチの方（腕）が描きてぇ描きてぇって躰ごと引っ張られた、そんなとこじゃねえか？　俺も気が付いたら家を出てたな。
お栄　後悔したことは？
北渓　そんな暇あるかよ。お栄もそうだろうが？
お栄　でもあたし、何描いたらいいかわからない。
北渓　あん？
お栄　いつだって目の前に手本がある。あたしは、それを一生けんめい引き写す。でもそんなことやってても……、
北渓　ただ真似しねぇことには始まらねえだろう？　師匠もよく言ってる。線は、ひとのを真似て真似て、ようやっとテメエのものになっていくって。
お栄　けど――あたしの本意気は、どこにあるんだろう？
北渓　情熱を賭ける場所なら、橋本町だろ。お栄の居場所は、等明の隣だ。
お栄　……。
北渓　心配しねぇでも、これから先、等明と探していきゃあいい。
お栄　アニさん――あたし、おっかさんにどうせ嫁ぐなら絵師がいいって言った。
北渓　望みどおりになったろ？　しかも油屋だ。
お栄　違うよ。……アニさん、あたし、
しのぶ　北渓さん！　こんにちは。

橋の上を来る、高田屋のしのぶ。上得意への届け物。

北渓　おお。珍しいな。店番はいいのか？
しのぶ　白木屋さんに届け物。
北渓　そりゃいい時に行きあった。お日さんの下で見ると一段と。なあ？（お栄に）
お栄　誰？
北渓　おめぇ――絵師なら知ってんだろ？　しのぶだよ。両国の煎餅屋、高田屋の。
しのぶ　当世三美人じゃねえか。
北渓　やめてそれ。あと浅草寺のお久と富士屋のお滝でしょ。一緒にしないで。
しのぶ　ああ、すまん。
北渓　ちょうどよかった。おとッつぁんが近々、北渓さんのとこに行くって。
しのぶ　どうした？

しのぶ　あのね、こないだあたしを描いてくれた絵、
北渓　おう、
しのぶ　あれ、おとッつぁんが店に貼ってたら、お役人がどうしても欲しいって。小判三枚で売れたのよ。
北渓　ほう！
しのぶ　そんでね、それ聞いた版元の耕書堂さんが、うちに来たのよ。あたしとお久とお滝。錦絵いっぺんに売り出して、誰のが一番売れるか競争だって。
北渓　そりゃいいな。
しのぶ　よかないから！　ほんと、一緒にしないで。
北渓　（笑う）
しのぶ　でね、おとッつぁんが今、白木屋さんで鼈甲の櫛を買ってくれるって言ってるの。綺麗な飾りが入ったやつ。それ出来上がったら、あたしの絵、描いてくれない？
北渓　おう、もちろん。
しのぶ　詳しいことは、おとッつぁんと耕書堂さんに聞いて。じゃあね。
北渓　待てよ、……俺でいいのかい？
しのぶ　北渓さんがいい。ほかのひとの方が着物の柄は素敵だけど、あたしは、北渓さんのあたしが一番好き。
北渓　そうか。ありがとな。……そんなら、着物の柄はお栄に手伝ってもらおうか。
お栄　え？
しのぶ　（お栄を）
北渓　こう見えて腕が立つぜ。北斎の娘なんだ。
しのぶ　……顔。墨がついてる。
お栄　（慌ててぬぐう）
北渓　俺はしのぶを見てるとな、まるで風鈴がいくつも空に鳴ってるような、愉しい気分になるんだよ。しのぶに一生会うこともねえ、江戸以外の連中にも、そんな気分を分けてやりてえ。音が鳴る絵、描きてぇだろう？
お栄　うん。
しのぶ　――このひとは、あたし、いいかな（拒否）。女の人に描かれたくない。
北渓　……こいつは女っぽくないぜ？　紅も引いてない。
しのぶ　ううん。いい。――行かなきゃ。そんじゃね北渓さん。
北渓　おう。また。

しのぶ、橋を渡っていく。

北渓　……。

お栄　……、（溜息を）
北渓　……すまん、
お栄　なんで謝るの？　……その通りだと思ってさ。あたし、あの子を見て、いっぺんも笑えなかった。
北渓　そりゃ――会ったばっかしだからだろ？
お栄　……欲深なんだ、きっと。女に生まれなきゃよかったって思ってんのに、どっかでさ……ああ、あんなふうに生まれつきゃ、さぞ楽だったろうなって。
北渓　楽かどうかは知らねえよ。
お栄　……帰る。今日のこと、忘れて。（歩き出すが）
北渓　――欲があるのはいいことだろ。
お栄　ドス黒ェよ。
北渓　黒くても――色にすりゃ一色か？
お栄　……、
北渓　漆黒か？　青まじりの鉄紺（てつこん）か。水底の泥の黒橡（くろつるばみ）。ヌラヌラ濡れる濡羽色（ぬればいろ）。あとはそう、赤い血が凝（こご）った朱殷（しゅあん）。おめぇなら、なんで描く？
お栄　考えたことなかった。
北渓　――おめぇの本意気も、そこにあるんじゃねえか？
お栄　……アニさんなら、何で描くの？
北渓　下塗りは……きっと藤色だな。
お栄　藤？
北渓　死んだ女房が好きだった色。
お栄　ああ……うん。
北渓　……橋本町に帰るんだよな？
お栄　ん。
北渓　ちゃんと帰れよ。フラフラしねぇで。等明によろしくな。
お栄　――アニさん、……、（頭を下げ）
北渓　おう。

去っていく北渓。お栄、反対へ――橋本町を目指し、歩き出す。

五　離縁

宵の時刻。橋本町、等明の家。
部屋には席画会から帰ってきたままの風呂敷包み。
そして、無言で絡まり合う男女。荒々しい息遣い。
男、等明が夜鷹を組み敷いている。

等明　……、（女の頸に手をかけ）

夜鷹は遊戯だと思い、荒い息で調子を合わせていたが、次第に本気で苦しくなってくる。

夜鷹　――ッ、（必死の抗い）

渾身の力で男を蹴り、押しのける。

夜鷹　殺す気かい。

夜鷹、出ていく。

ひとり残る等明、夜鷹が残していった赤いしごきを首に巻く。

酒を煽るところ、お栄、帰ってくる。

お栄　ただいま、

一歩部屋に入ると、ムッとした白粉の臭いが鼻につく。

等明　よう、

お栄　おしろい？　……ひでぇ臭いだよ。

等明　今の今まで烏がいたんだ。俺があんまり啼かすんで昇天しちまった。――どこ行ってた？

お栄　別に。

等明　北斎のところか？

お栄　いいじゃねえか。

等明　――おまえって女は、旦那が疲れて帰ってきても、出迎え一つしやしねえ。湯気の立つ鍋もなけりゃ味噌の匂いもしやがらねえ。旦那に物食わそうって了見がねえのか。

お栄　そんなことはないけど。

等明　それはなんだよ？

お栄　……魚の煮付け。

等明　どうせそこらで買ったもんだろ？　ドブ臭ェ店の赤の他人が作ったものを旦那に食わして平気なんだろ？

等明、お栄の手から包みを奪って土間に投げ捨てる。

お栄　――。

等明　そんなこったろうと思った。席画会で出た折詰、持って帰って良かったよ。

等明、席画会の風呂敷をほどく。画材や紙と一緒に折詰が出てくる。

お栄　――席画会どうだった？

お栄、等明の絵を見ようと風呂敷に手を伸ばし――、

等明　（阻止する）――見る目がねぇんだ。どいつもこいつも、金があるだけの下卑た連中ばかりでよ、本物の価値がわからねえ。渓斎英泉なんぞ、あんななめくじみてぇなヌラヌラした絵を持ち上げてよ、一緒にされたかねえやなあ。

お栄　英泉の絵はそんなじゃねえよ。あいつの筆は、なまの部分をそのまんま、

等明　そんなこと聞きたいんじゃねえ。おまえ、あれか？　英泉とは寝てんのか？

お栄　……（首を振る）、

等明　一緒に暮らしてたじゃねえか。

お栄　親父の居候ってだけだよ。なんでそんなこと言うんだよ。……会のことは仕方ないだろ。うまくいかねぇことも、

等明　恥かかされた、おまえのせいで。そのせいで筆が乱れた。

お栄　……、

等明　俺が衝立の裏にいたらな、西村屋が面白ェこと言ってたよ。北斎は、俺の腕を見込んで娘を嫁がせたんじゃない、油屋が目当てだと。気づいてねぇのは俺一人だと。北斎もずいぶんチンケな野郎じゃねえか。

お栄　――、

等明　笑ってたのか、俺のこと。北斎と英泉と。三人で俺のことあざけってたか？

お栄　しねぇよ、そんな……、

等明　本当のこと言えよ！　なあ、なんて言って笑った？

お栄　いいじゃねえか。

等明　何が北斎だ。そんなに偉ェのか？

お栄　いい加減にしろよ。北斎北斎って、そんなに気に入らなきゃ、金輪際やつのことなんざ口にしなきゃいいんだ。あんたも絵師なら、てめぇの絵だけ考えてりゃいいだろ？　少なくともやつはそうだよ。……そう、北斎はてめぇのことしか考えちゃいない、他のやつはどうでェいい。あんたのことも、あたしも。

等明　――どこまで……、

等明、お栄の画材をかき集めて突き出す。

等明　捨てろ。目障りだ。

お栄　――、

等明　おまえの後ろに北斎がちらついて、うるせぇんだよ。

お栄　じゃ、なんであたしを欲しがった！？

等明　――、

お栄　今更気づいたのかよ？　てめぇは、ただの蛾。取るにたらねぇ蛾なんだって。
炎に憧れて近づくけど身を焼かれて苦しむだけ、

等明　……、

お栄　てめぇ自身は決して炎になれないって！

等明　うるせぇ！（顔を背け）

お栄、等明の席画会の荷物から、等明の絵を――。

お栄　（笑いが漏れる）……なんだこれ……、

等明　――、

お栄　絵面も趣向も歌麿の引き写し。なんもない絵……。

笑うお栄、それは泣いているようにも。やがて等明に手を伸ばす。

お栄　――あんた、あたしと似てる。

等明　女のお前と？　――一度は許せても、二度は許せねえ。

お栄　……そうじゃねえんだ……笑ったのはただ……、

等明　何がそうじゃねえだ？　揃いも揃って――、

お栄　違うんだ、あたしは――。なあ、ここには北斎なんていやしねえよ。いるのは
はただ、あんたとあたし。あたしを見なよ、

お栄、等明に触れる。自分から口を吸おうと――だが等明、

等明　出てってくれ。

お栄　……、

等明　真っ平だ。離縁する。

お栄　――そうかい、

お栄、自分の画材をひっつかむ。
振り返って等明を見るが、怒りと悔しさに満ちた拒絶の背中。

お栄　――ッ、

お栄、出ていく。

六　春画

お栄、どこをどう辿ったか、夜の中を走る。
夜九つ（真夜中１２時）近くの時刻。

お栄　（つまづき）あッ――、

倒れ、土に伏す。闇の気配が身に迫る。
野犬が遠くで吠える。風が吹き、竹藪のざわめき。

夜泣き蕎麦　大ひら しっぽく ぶっかけ……大ひら しっぽく ぶっかけ……、

闇にボウ……と浮かぶ行燈。
お栄、光の元へ向かう。
竹藪を抜けると二八蕎麦の屋台が現れる。

夜泣き蕎麦　大ひら しっぽく ぶっかけ……、

お栄、屋台に近づく。夜泣き蕎麦の主――辰に話しかける。

お栄　ぶっかけ。
辰　へい。

すぐに蕎麦が運ばれる。

辰　お待ちどう。
お栄　（一口――さらに数口）――旨ェや……、
辰　お分かりで？　昔はちょっとしたお店におりました。その時分、仕込まれまして。

別の床几にはすでに先客の男性、背を向けて、手酌で飲んでいる。
また竹藪の奥からは、時折かすかに女の最中の声。

辰　……おまえさんも夜鷹で？
お栄　違うけど、じきなるかもな。そしたら爺さん買ってよ。
辰　有り難ェがあっしはだめでね。昔、炊事場の湯をひっかぶって使えなくなっちまった。男じゃねえんで。
お栄　そう。つらい？
辰　慣れやした。できねえもんを焦がれ続けても詮ないんで。ま、時々はチラとね。ひとッつ願いが叶うなら、一度でいい、惚れた女を悦ばしてぇ。
お栄　……惚れた女、
辰　こんなあっしにも嬶がいるんで。あっしが男じゃねぇと分かってて駆け落ちしてくれた女で。お世話になったお店を裏切って二人して逃げた。あっしは見てのとおりだが嬶はまだ女盛りだ。いつかあっしとのことを悔やむんじゃねえかって。それ思うとやりきれねぇんで。
お栄　でも、惚れるにはそればっかじゃねえだろ？　おっちゃんの蕎麦、旨ェよ？
辰　嬉しいこと言ってくださる。……夜鷹じゃねえなら、早くお帰りなすった方がいい。その竹藪の裏は徳本寺。近頃、妙な連中が世直し大明神を崇めて夜中に来やす。
お栄　ふうん……、

暗闇の中から手燭を頼りに女が来る。

お栄　ごっそさん。（袂から銭を）
辰　暗いから、これお持ちなせぇ。褒めてくだすった礼です。返しはいつでも。
お栄　ありがとう。（手燭を借り、歩き出そうとするが）
おみね　あんた、弁当持ってきた。まだあったかいよ。
辰　すまねぇな、おみね。

お栄、手燭を掲げると、二八蕎麦の提灯の明かりの中で、おみねが辰に寄り添っている。

辰　おみね、お願いだ。今夜も。
おみね　いいよ。あたしは……、
辰　あそこの客。主の急な使いで出て遅くなったらしい。悪いお人じゃなさそう

だ。

おみね　でもあんた、何度も言うけどあたしは――あんたがいりゃ満足なんだよ。

辰　それじゃ俺が苦しいんだ。頼む、おみね。後生だから。俺がそうしてほしいんだ。

おみね　……わかったよ、

竹藪の裏、聞こえてくる音楽の調べ。
近づいてくる灯りと踊りの群れ。
顔を隠した男女の群れが踊りながら通り過ぎていく。
おみね、床几の男の前に行き、何やら話す。
やがて男の上にまたがるように座り、ゆっくりと動き出す。

辰・おみね　――、（ひたすらに互いを見つめて）

辰　大ひら　しっぽく　ぶっかけ……、

お栄、懐から取り出した絵筆と紙。雪洞の明かりを頼りに描く。
踊りの群れ、通り過ぎる。
おみね、男の上から降り、乱れた着物を直す。
辰の元へ戻ろうと――、

おみね　……嬢ちゃん？　なんであんたここに……？！　見てたの？

お栄　ごめん、

おみね　何描いてんだよ。やめて――（奪う）やめてったら！

おみね、絵を奪う。その絵を見て、動けなくなる。

お栄　……おみねさん？

おみねの肩が震える。絵を辰に差し出す。

おみね　あんた、見て。これ、あんたとあたしだよ。あんたの顔、描いてくれたよ。

辰　（絵を見る）――あ……、

おみね　……嬢ちゃん。ありがとうね。

おみね、絵を抱きしめて泣く。そのおみねの肩を辰が包む。

七　朝

北斎工房の前。
明け方、空が白んでくる頃。長屋はまだ眠りの中にいる。
その中で一部屋だけ、がたがたと戸が開き、北斎がひとり出てくる。
夜を徹して絵に没頭していた。白む空に目を細める。

北斎　（大欠伸）……朝かよ……、

外には長屋に住み着く犬が一匹。

北斎　おう、犬ころ――（犬の鳴き真似）……ふん、

続いて善次郎、同じく一晩描き続けて。
まだ絵筆を持ったまま、煙草を吸いながら外に来る。

善次郎　（大欠伸）……腹減ったなァ、師匠。
北斎　善の字、饅頭。
善次郎　まだ店開いてねぇよ。
北斎　おう、その犬ころ食っちまうか。
善次郎　やだよ、なに言ってんスか。
北斎　やれ、善の字。
お栄　んなもん食ったら腹ァ下すよ。

長屋の入り口、お栄がいる。

北斎　お栄、
善次郎　（煙草を離す）
お栄　腹弱ぇくせに、ゲテもん好きなんだから。竹輪貰ってきたんだ。食う？
北斎　なにしてんだ……まだ明け六つ前だぜ。
お栄　いい蕎麦屋があってさ。おやじどの、きっと好きだよ。
北斎　なにしてんだって聞いてんだ。
お栄　出てきたんだよ、等明んとこ。
北斎　出てきたって――そりゃつまりよ……、
お栄　……うん。
北斎　ふん……そうか。
善次郎　（煙草を吸う）

お栄　あたしも夜通し描いてたんだ。

お栄、懐から紙を出す。――それは、おみねと辰を描いた春画。

善次郎、煙草を消し、絵を見る。

善次郎　（惹き込まれ）――、

北斎　ん、（寄こせ）

北斎、絵を見る。――お栄、緊張しながら北斎を見つめている。

北斎　――けっ、（部屋の中へ）

お栄　……っ、

お栄、北斎に追いすがりたくとも、動けない。

善次郎　……あー、またはじまっちまった。夜通し描いてたんだぜ？　化物かよ。

北斎（声）　オイ！

善次郎　無理ねぇか。俺だってこんな女見せられりゃ……、

お栄　――善次郎。じゃあ、

善次郎　うん。ワ印としちゃ地味だし暗ぇが――好きだぜ。この女の顔。心ん中が見える。胸の裡の声が聞こえる。少なくともこんな女は、鳥居清長も歌麿も、ついでにこの渓斎英泉も描いちゃいねぇな。

北斎（声）　オーイ！

善次郎　呼んでんぜ。

お栄　でも、

善次郎　俺は出てくよ。おまえが戻って来るんなら居候は終いだ。

お栄　なんで？　前みたいに三人で、

善次郎　肚ァくくったんだろ？　だったら、こっから先のおまえは張り合う相手だ。馴れ合うのはやめようや。師匠だって、ほれ、無駄に負けん気出しちまった。

お栄　どこ行くんだよ。

善次郎　さあな。吉原か品川か……描けて女がいりゃどこだっていいさ。俺ァふらふらがいいのよ。（歩き出す）

お栄　待って、善次郎！　……竹輪、食う？

善次郎　（笑う）いいよ。師匠にやっつくんな。

善次郎、去る。

北斎（声）　オイ、紙持ってこい。オーイ！

お栄　オイオイうるせえよ。行くから待ってろ。

お栄、工房に入っていく。

やがて日が高くなり、長屋の活気、鳥の声。

（時の経過）

一人の男――川原慶賀、北斎工房の前に立つ。

慶賀　お頼み（たの）申す。こちら北斎殿のお宅でしょうか。長崎は出島のオランダ商館から、シーボルト先生の使いで参りました。

八　かわら版

江戸の町なか。

口上を述べながら商う商人、かわら版の読み売りたち。

細い棒や箸を持ち、拍子を取りながら、江戸町民に呼びかける。

読売１　評判評判。

読売たち　なんだなんだ。

読売１　かの北辰一刀流の千葉周作、その門弟のお人が飛騨の山中で身の毛もよだつ大ムカデに会ったそうだ。全長は一丈五尺、重さは二十八貫目。だが天下の剣豪、怯むことなくたった一太刀で討ち取った！　この大ムカデ、間違いなく化物のごとき大きさで、山中に置いておくのはチト勿体ない。ひそかに江戸に運ばれて大名たちがご覧になったが、ついにこの度、江戸両国の回向院にて広くお披露目と相なった。正真正銘大ムカデ。冥土の土産に見なきゃ損だよ！

読売２　評判評判。

読売たち　なんだなんだ。

読売２　そこなお大尽、吉原の細見は買ったかい？　吉原とは可愛いあの子が待っている夜のない里、細見とはよくお聞き、なんでも細かくワケがわかるということだ。今そのわけを申そうなら、まずは花の大門、仲の町（ちょう）。きのう京町（きょうまち）、主（ぬし）に血道を揚屋町（あげやちょう）、伊達と意気地の江戸町から、惚れた気持ちの角町（すみちょう）に、数えてみれば千軒の、軒を連ねた遊女屋の、屋号はもちろん一晩の値段もハッキリ書いてある。どこのどの子は抱き詰めで、この子とあの子はお決まり幾つ、遊びの手ほどき道しるべ、さーァ、細見、読まないか！

読売３　評判評判。
読売たち　なんだなんだ。
読売３　長崎は出島から新たな商館長（かぴたん）ストウレルご一行が、江戸参詣にやってきたよ。お供には、奇跡の医師と評判名高いシイボルトと申すお方。この先生、なぜ奇跡かと申すなら、ある長崎の商家の娘、両の目に白い膜がかかって見えなくなるてぇ病に掛かった。ところが先生、膜を取り去る奇術を使い、あな不思議、娘の目を良くしたってぇから驚きだ。かぴたんご一行とシイボルト先生は、日本橋の長崎屋に逗留中だ。さーァ、異人を見るなら今、紅毛（あかげ）を見るなら今だよ！

九　西洋の風

北斎工房。長屋の外は風。戸を揺らしている。
北斎とお栄、そして風呂敷包みを持った川原慶賀がいる。
北斎は慶賀を無視して絵を描き続けている。

お栄　それで？　長崎から来たって？
慶賀　はい。江戸の土ば踏んだらイの一番に北斎殿をお訪ねしようと思うとりました。おいはずっと北斎殿の絵手本ば引き写しながらコツコツ学んで。そいが今、本物の北斎殿が目の前に、
北斎　（塵に埋もれて）
慶賀　お女中、余計な世話かもしれんばってん、まちーっと綺麗にしたらどげんね？
お栄　女中じゃねえ。あんたは誰だよ。
慶賀　お初にお目にかかります。川原慶賀と申します。出島からフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト先生のお供で参りました。
北斎　ふりっ、ふらっ――誰だって？
お栄　さあ。
慶賀　先生からお話のありますけん、日本橋の長崎屋へお越し願います。
北斎　なんで俺が行くんだよ？　用があんならそっちが来やがれ。
慶賀　恐れ入ります。ばってん先生は自由に動くことが許されとりませんけん。好きに動けるとは出島と、こん江戸では長崎屋の屋敷だけ。江戸への道中もお役人にビタァッと見張られ、長崎屋にも町の衆がベターッと貼り付き、籠の鳥たい。
北斎　なおいけねぇ。俺ァ何が嫌いってビタァッ・ベターッ・籠の鳥よ。帰ってくんな。
慶賀　北斎殿、

北斎　帰れと言った。
祥吉　失礼します。北斎先生、

祥吉が来るところ、

慶賀　（気合い）――ッ！

慶賀、気合いとともに部屋の中の虫を成敗する。

慶賀　ムカデでございます。こいつには毒のある。
北斎・お栄　……。
祥吉　な――なんですか？！　このお人は？！
お栄　出直しとくれ。取り込み中だよ。
祥吉　いただくものをいただければ……、
北斎　出来てねえ！　あとちょっとなのにこいつが――、
慶賀　では、手短かに、こん川原、シーボルト先生に替わりまして、用向きを申し上げます。
祥吉　シーボルト？
慶賀　肉筆画をお願いしたいとです。江戸の町びとたちの暮らしをお描きいただきたい。男と女、赤ん坊から年寄り、それぞれの暮らしを。
お栄　面白ェの？　その画題。
慶賀　ありきたりがよかとです。江戸の暮らしをお描きいただき、お国へ持ち帰りたいと。枚数は百枚。もちろん御礼は十分に。
北斎　本当かよ。前に一度、かぴたんと付き合ったが、ひでぇ目にあった。１５０両の絵巻物二巻、描いた挙句に値切られた。
慶賀　シーボルト先生は信用できるお方です。そん証拠に、必要な紙やら画材はこちらでお持ちいたします。
祥吉　待ってください、その――失礼いたします、それは、どうかと。
北斎・お栄　（祥吉を）
祥吉　お国へ持ち帰るとは、つまり阿蘭陀へ？
慶賀　はい。
祥吉　いけません。西村屋永寿堂、主はここにおりませんが、全力でお止め申し上げます。
お栄　なんでさ？
祥吉　出島からの一行はお上に監視されております。うちが錦絵の商いで呼び出されますのも、長崎屋の座敷だけ。それも入るとき、出るとき、お役人の改め

を受けております。お上が何を危ぶんでるかは知りませんが、関わらねえに越したこたァありません。

お栄　でもおやじどの今、前にもかぴたんとやりとりしたって。

祥吉　それは、いつ？

北斎　まだ北斎の号を使いはじめた時分だな。寛政の十年かそこら……、

祥吉　つまり、喜多川歌麿が、あんな目に合う前でございますね。

慶賀　――歌麿殿。何か？

祥吉　川原さまはずっと長崎でございますか？　歌麿殿が松平定信の気に障って、手鎖五〇日の刑に遭った。

慶賀　何をなさって？

祥吉　秀吉の花見の絵を描きなすって。それだってただ画題にしたってェだけでした。なのに松平は歌麿殿を見せしめに。結局、手鎖五〇日の後は、歌麿殿の手首は、鳥の足のようになっちまって、そのまま亡くなった。

北斎・お栄・慶賀　……、

祥吉　西村屋は――いえ、あたしは、葛飾北斎を喪いたくはありません。いつか、摺らせていただくお約束ですから。

北斎　約束はしてねえ。

祥吉　お上が異国を危ぶんでいる以上、あなたさまにはどうぞ、お引き取りいただきたい。

慶賀　……。

祥吉　うちの続きを。先生。

北斎　――なあ、そりゃなんだ？

慶賀　ああ――お持ちした、見本でございます。

慶賀、風呂敷包みを解く。中から現れる西洋画。

お栄　なんだ、この絵――、

慶賀　シーボルト先生からのご注文。肉筆画百枚はすべての絵を西洋の画法でお描きいただきたいと。

お栄・北斎　西洋の画法！

北斎、絵を取ると、食い入るように見だす。

お栄　妙な絵だ――裸の赤ん坊に羽が生えてら。頭に輪っか？　奥行きはあるようだけど。

北斎　三ツ割の法を使ってんだな。

慶賀　三ツ割の法とは？
北斎　絵面の決め方だ。まず紙を、上・中・下、三ツ均等に割るだろ？　で、上二ツを天、下一ツを地とする。そんで天と地の境目、真ん中に一点を打つ。あとはそこに向けて、竹尺とぶんまわしで絵面を決めてく。
慶賀　さすが北斎殿。すでに遠近法を会得されているとは。
北斎　アア？
慶賀　そいは西洋では遠近法という画法です！　おいはシーボルト先生から初めて教わりました！
北斎　なんだよ。あっちのやつらも竹尺とぶんまわしで描いてンのか？
お栄　あとこの絵、墨線がないね。
祥吉　――見せてください。

祥吉、こらえきれずに絵を見る。

お栄　下絵を塗りつぶして、色を重ねてる？
慶賀　そうです！　墨線は使わずに色の濃淡、陰影で描き分けていくのです。これも極意。
お栄　顔も違う。鼻の穴まで描いてやがって、情緒がねえや。
慶賀　まさに！　目に映るまま、見えるままを描く。それが西洋画です。いや、さすがはご一門。お女中まで目の肥えとらす、
お栄　女中じゃねえって。
祥吉　やはり、描く必要はございません。先生は、錦絵の大看板。錦絵には彫師と摺師がおります。墨線のない絵なぞ。
お栄　……でも、時々は思うぜ？　錦絵の客が目にするのは、彫師の線と摺師の色。あたしらの筆じゃねえんだなって。
祥吉　筆跡をそのまま紙に載せるべく日夜技術を磨いております。髪の生え際も着物の柄も。摺りだって、たとえ何百摺ろうが変わらぬよう、
北斎　だが今が最上じゃねえだろ？　まだこの上がある。そうは思わねえか？
祥吉　――、
北斎　……面白れぇな。線じゃなく色を重ねて描く。墨線がなくても揺るがねえのは、竹尺とぶんまわしで絵面が定まっているからだ。――違ェねえ、見ろよ、描きためてたんだ、蜘蛛の巣もツバクロもそこの路地の家だの屋根だの、全部竹尺とぶんまわしの組み合わせだ。これさえあればなんだって描ける。
慶賀　（帳面）――ああ、この猫は――なんと丸まるとして――、（涙ぐみ）
北斎・お栄・祥吉　……、
慶賀　おいは北斎殿の漫画ば写して絵ば学びました。写しとりますと涙の出てきま

す。さらりと描かれただけなのに、あったこうして楽しゅうて。だからこそ、シーボルト先生に、江戸の人々の暮らしをご覧いただくなら、北斎殿の筆がいいと。そうすればきっと阿蘭陀の人びともこん国のことが好きなる。北斎殿、どうかお引き受けいただきたい。

北斎　墨線のねえ絵はまだ描いたこたねぇな。

祥吉　先生！

北斎　テメェこそよく見ろ。摺師として、この色摺れるか？

祥吉　――、

北斎　彫りも絵の輪郭を取るのもできる。けどこの色――この色の重なり、ぼかし、陰影。テメェこれが摺れんのか？

祥吉　……摺れ、

北斎　摺れねえなら、テメェが出てけ。俺はもっと上に行きてェんだよ。雲も波も富士も、墨線なんぞに縛られちゃいけねえんだ。

祥吉　――、

北斎　川原の。

慶賀　は、

北斎　長崎屋に連れてけ。海の向こうの話、聞いてみてぇ。

慶賀　はいッ！　ありがとうございます。駕籠を呼んで参ります。

慶賀、出て行く。

お栄　百枚の割り振りはどうするんだ？

北斎　北渓に任せろ。季節ものは北渓が描けっつっとけ。それからお栄。おめぇは女を描け。

お栄　女を、

北斎　吉原行ってこい。前に襖絵描いてやった店があるからよ。祥吉ィ、

お栄　あげてくれるの？　金ないけど。

祥吉　花代は西村屋が。主を説き伏せます。

祥吉、出ていく。

北斎　（大笑いし）――血が滾る！！！

慶賀（声）　北斎殿、駕籠がまいりました！

北斎　行ってくる。

北斎、外に出る。外でうなる風の音。

北斎　すげぇ風だな！（出て行く）
お栄　おやじどの、羽織り持ってけよ！

追いかけようとしたお栄、外に出るところ、ゴウッと風が吹き込む。

お栄　（風を受け止め）――あッ、

室内に吹き荒れる風。北斎の描きかけの下絵が部屋中を舞う。

お栄　（絵筆を握り）――ッ、

お栄、風の中、自分も絵筆を掴んで出ていく。

十　吉原

六ツの拍子木。灯ともし頃の仲の町、表通り。
格子の向こうに並ぶ女たち。通りからそれを眺める男たち。
軒には、八朔前の玉菊灯籠が揺らめく。
西村屋与八とお栄。表通りを来る。
お栄、思わず立ち止まり、男や女、町の風情を見つめる。
与八がお栄を振り返り、ふたり町に紛れていく。

冨士屋の座敷。与八とお栄、男衆に示されて、座敷に来る。
表通りの賑わい、他の座敷の笑い声が流れ込んでくる。

与八　固くなるこたァありませんよ。
お栄　……なってねえ。（帳面と筆を取り出す）
与八　ほう。頼もしい。
お栄　茶化すなら帰っとくれ。
与八　おあし出してんのは誰だい？　――せいぜい気張っとくれよ。あの霧里が初めて描いていいと許したんだ。
お栄　初めて？
与八　いつぞやは渓斎英泉も断られた。
お栄　――、
与八　今を時めく絵師どもを断り、無名のおまえさんを受け入れる。何かありそうじゃねえか？　阿蘭陀さんの座興なぞトットと片づけて、おまえさんの本意

気、見せておくれ。
お栄　善次郎はどうしてる？
与八　会ってねぇのか？　――店にゃ時々顔出すけどね。……北斎先生のとこを出てからこっち、ありゃまるで、もやい綱の切れた舟だよ。しかも泥船だ。ずぶずぶ沈んで良くねぇ連中と絡まって、絵師としちゃますます凄みが出てきたが、あたしが思うに――、
お栄　なんだよ、
与八　もしかすっと、筆を断つ。
お栄　え？
嘉兵衛　お待たせしましたね。

冨士屋嘉兵衛、芸者 滝野（お滝）を伴って入ってくる。

嘉兵衛　久しぶりですね。永寿堂さん。
与八　ご無沙汰いたしました。
嘉兵衛　そちらが絵師？
与八　北斎の娘、栄にございます。ここの主、嘉兵衛さんだ。
お栄　（頭を下げる）
嘉兵衛　あんたが描くのか？　若いな。
お栄　――、
与八　失礼ながら、この子は幼い頃から腕が立つ。北斎の血を継いでおります。
嘉兵衛　ふん――血で描くわけじゃあるまいに。が、他に取り柄もなさそうだ。
滝野　（たしなめ）旦那さま、
嘉兵衛　――茶屋から呼んだ芸者。滝野と言う。
滝野　滝野と申します。一度、北斎さまのお座敷にもお呼びいただいたことがございます。北斎さまが立ちどころに、襖いっぱい紅梅の花を咲かせて。見事でございました。
お栄　どうせ、おあしがなかったんだろ？
嘉兵衛　そのとおり。だが得をしたのはこちらだよ。あれから一段と客が増えた。今日引き合わせる霧里もめでたいことに、
与八　もしや、
嘉兵衛　ああ。落籍（ひか）れることになった。
与八　霧里花魁を身請けなさるとは。樽代はいかほどで？
嘉兵衛　九百、
与八　九百両！　そりゃ豪儀な。
嘉兵衛　お栄さんと言ったか。霧里は九つでここへ来て、今月の末――あと僅かで晴

れて大門を出て行きなさる。その花魁が吉原（ちょう）の名残に、女絵師になら描かせてもいいと言いなすった。これも縁だ。心を尽くしてやってくれ。

お栄　はい。

嘉兵衛　花魁、こちらへ。

霧里花魁、入ってくる。

霧里　霧里でありいす。

与八　霧里花魁、このたびはおめでとう存じます！

霧里　（頷く）

嘉兵衛　それじゃ永寿堂さん、あちらで（酒）どうだい？

与八　いただきますとも。――大丈夫だね、お栄。

お栄　ああ。

与八　その、花魁のお時間はいかほどいただけて？　半時？　四半時？

嘉兵衛　一晩。花魁は今夜、自分で自分を買いなすったよ。

与八　！

嘉兵衛と与八、連れ立って出て行く。

座敷の中に、ほかの座敷の賑わいが流れ込む。

滝野、三味線を弾き始める。

霧里　ぬし、名前は。

お栄　栄と申します。

霧里　女絵師を呼んだのに、まるで青い胡桃のような。

お栄　嫌なら帰ります。

霧里　（微笑む）

滝野　お栄さん、花魁は、この苦界から、これ以上ない仕合わせを手に、出て行かれようとしています。材木商、神田屋の若旦那から後添えにと望まれて。花魁は、男客のためではなく、ここで生きる女たちのために絵姿を残されたいと。ここで生きる女の希望となるように。

お栄　あたしだったら妬んじまうかも、

霧里　妬むことも張りのひとつ。張りがあるうちは生きられましょう。

お栄　……、

霧里　美しゅう描いておくれ。

お栄　――始めます。（紙と筆を）

滝野、三味線と恋い慕う唄を。
霧里、唄に舞う。座敷に差し込む月の光。
お栄、霧里を見つめ、一心に手を動かす。

お栄　なぜそんな顔を？　……寂しそうな、
霧里　月の加減でございんしょう？　何を描きんした？
お栄　描きかけです。
霧里　見せて。
お栄　――、（絵を差し出す）
霧里　これがわっち？
お栄　目に映るまま写し取りました。
霧里　……、（下絵を破く）
お栄　あっ、
霧里　わっちはそんな顔はしとりぃせん。そんな……気味悪い、
お栄　すいません。
滝野　（破かれた絵を見る）
お栄　その――新しい画法で絵を描きたいと。見えるまま写し取るように。
霧里　そんなもの描いてほしくはおっせん。絵師なら絵師らしく、浮世の絵を。明るさだけ描きゃいいものを。酷なことしなしゃんすな。
お栄　あ……、

霧里、出て行こうと。

滝野　お待ちください花魁。未練がおありなんでしょう？
霧里　……、
滝野　男絵師なら気づかぬものも、お栄さんは描こうとされた。お栄さんならあるいは、花魁の願いを叶えられるのでは。
霧里　……、
滝野　最後にご自身を描かせようとされたのはなぜです？　ここに残していきたかったわけは？　……大門を潜ってしまえばそれまでです。花魁はこの苦界を忘れ、日の当たる場所で生きていかれる。この滝野、新参者だった私を引き立ててくださった御恩、忘れておりません。花魁には仕合わせになってほしゅうございます。
霧里　……、
滝野　お栄さんは、並の女絵師ではございません、絵師となるため嫁ぎ先を出てきたそうです。しかも初夜を抜け出して、火事場で絵を描いていたと。

お栄　――なんで知ってんだよ、

滝野　お栄さんは、光と影、その両方を一枚の絵に写し取ろうとしておられる。ならば闇を見るのも怖くはないでしょう。

霧里　（破った絵を見る）

滝野　今夜を逃せば機会はございません。いかがですか。

霧里　――分かりィした。

お栄　……、

霧里　お栄さん、わっちにはここに心底好いたひとがおりいす。誰に落籍（ひか）されようとも、わっちの心はその人のもの。……この恋を描いておくれ。

お栄　恋を――、

滝野　さっき、目に映るまま写し取ると仰いましたね。

お栄　はい。

滝野　ならば、実の目でなく心の目で。心に映ったものをお描きください。

お栄　――、

霧里　どうせこれから行く先じゃ目なんぞ役に立ちいせん。それでも描いてくれんすかえ？

お栄　描きます。

霧里　ついておいで。

霧里、座敷を出ていく。お栄、紙と筆を持ちついていく。

滝野、三味線で唄の続きを。

お栄　どんな方ですか、花魁？　この見世の方ですか？

霧里　見ればわかりィす。そのひとは、わっちの初めてのひと。その人がいたから、わっちは今まで生きてこられた。

廊下に並んだ座敷から、障子を透かして見える男女の影や笑い声。

障子の中で明かりが揺らめき、数々の男が存在する気配。

廊下を曲がってきた男、お栄とすれ違う。

その顔にお栄、ハッと振り返る。善次郎によく似た男。

お栄　――善次郎？

お栄、確かめようと思わず一・二歩踏み出すが、男は座敷へ。

障子越しに、遊女が男を嬉しく迎え、男が遊女を抱きすくめる影。

お栄　……ッ、（顔を背け）

お栄、振り返ることはできず、逃げるように霧里についていく。
男が、明かりを消したのか座敷は闇へ。
やがて滝野の三味線も途切れ、店の最奥へ。人の気配も絶えた闇。

霧里　お入り。
お栄　ここは？

十一　闇の色

闇の中、檻のような布団部屋。

お栄　花魁？　どこです？　これじゃなんにも、

板壁の隙間から僅かに差し込んできている月光。

お栄　（次第に眼が慣れ）……あ、

月の光の中に白い影が浮かび上がる――病み果てた女、夕霧。

霧里　わっちの姉女郎、夕霧さんさ。
お栄　この匂い――死、
霧里　じきに。でもまだここにいる。……そこに枕明かりが。

お栄、小さな明かりに光をつける。
栄が明かりを掲げるところ、霧里、夕霧に近づく。
夕霧、小さな光に射抜かれるように目を覚まし怯える。

夕霧　う――あ……、

霧里、夕霧の痛ましさに胸をつかれる。

霧里　……そんなになって。ずっとひとりにしてごめんなんし。
夕霧　……あ……うあ……、
霧里　姐さん、
夕霧　来るな――、

霧里　何もしんせん、
夕霧　来るなァ！　……連れてかないで。ここにおりいす――わっちはここに、
霧里　誰も恐いこたしねぇよ。安心してお休みなんし。
夕霧　――まだ死にたくねぇよ、
霧里　死なねぇよ。わっちがいるから。
夕霧　……シンさん、早く迎えに来てくれよ……、
霧里　――姐さん、まだ……、
夕霧　約束したもんね。シンさん……、

夕霧、ボロ布を男からの起請文であるかのように抱いている。
霧里、夕霧から取り上げる。

霧里　もう、あんな男はおっせんよ。
夕霧　（取り返そうと）
霧里　姐さんをそんな躰にした男じゃござんせんか。なんでまだ、
夕霧　シンさん……！　返せ……、

夕霧、霧里からボロ布を取り返すと、愛しく抱く。

霧里　みっともねェよ、夕霧花魁。そんなになってもまだあの男を忘れねぇか？
夕霧　（泣き始める）
霧里　もういいでしょうに……ね？　ひとりで逝くのが寂しけりゃ霧里を思い。
夕霧　……きりさと、
霧里　そうさえ、姐さんを追い落として、何もかも奪った女さ。姐さんの着物、座敷、お職の座。それから自由。
夕霧　自由、
霧里　姐さんがシンさんと潜るはずだった大門を、霧里が出て行きしゃんす。姐さんが真っ暗闇で一人寂しく死んでく間に、霧里が贅をこらした華の道中、誰も彼も釘付けにして、真っ昼間の大門を笑いながら出て行きしゃんす。妬ましくないかえ？
夕霧　あ――、
霧里　霧里をお恨みな。姐さんの最後の命をぜんぶ賭けて、恨んで恨んで死んでいきな。そんで自由になったらきっと――この霧里に取り憑いとくれ。
夕霧　きりさと、
霧里　――。
夕霧　そんならあの子は、行くんだねぇ。

霧里　……、
夕霧　出て行けるんだ。よかったねぇ。

夕霧、闇の中、見えない空を見る。
そして命の火が一段と細くなったかのように布団に戻る。
霧里、お栄の元に戻る。

霧里　わっちはここへ来てほんに仕合わせでありィした。親に売られた絶望を姐さんが掻き消してくれた。生きる甲斐をくれた。姐さんのいない人生はありんせん。
お栄　花魁、
霧里　ぬしにもおっせえすかえ？　てめぇを変えてくれる誰か。
お栄　――、
夕霧　おなつ。どこだえ？
霧里　あ、
夕霧　また眠れないのかい？
霧里　姐さん……、
夕霧　ほら、ご覧。蛍だよ。ひとつ、ふたつ……綺麗だねぇ。
霧里　あい。ほんに。

霧里、夕霧に寄り添う。
夕霧、幼い禿をあやすように霧里の背に手を回し、口ずさむ子守歌。
お栄、やわらかな明かりの中、闇を透かすように二人の姿を描く。
――布団部屋は再び闇の中へ。
朝日の中、大門前の表通り。
帰っていく男衆に紛れ、画材を持ったまま歩いてくるお栄。

お栄　（絵を見つめ）――、

与八、命の洗濯をした清々しい顔つきで来る。

与八　お栄ちゃん。
お栄　おっちゃん……、
与八　ハァ、夢のありんす国。生き返ったねぇ。そっちの首尾は？
お栄　……、
与八　見せてご覧。

お栄、与八から逃げるように絵を隠す。

お栄　うァ……、あ――――！
与八　お栄ちゃん、なんだよ、ちょっと、
お栄　足りねぇんだよ……なんもかも……！　あたしにゃなんもねぇんだよ……
　　なんも知らねえんだ……、絵なんざ描けるかよ、莫迦野郎……！
与八　ちょっ――なんだね、おまえはモウ……（周りに）なんでもないんですよ、

滝野、お栄と与八の前に来る。

滝野　お栄さん、
与八　昨夜の。――ええと、滝野さん。
お栄　（顔を背ける）
与八　こんな有様ですよ。花魁に仕出かしちまいましたかねぇ？
滝野　いいえ。花魁がこれを。

滝野、紅梅色のひとつ玉がついた簪を渡す。

与八　こりゃあ珊瑚じゃねぇか。
滝野　北斎さまがお描きなすった紅梅と同じ色。
お栄　いいよ、こんな……もったいない……、

滝野、お栄の髪に飾ってやる。

滝野　花魁は、お栄さんに、よく見届けてくれた。ありがとうって。
お栄　でも……描けなかったよ。今のあたしじゃ、あんな心、まるで描けない……！
滝野　それでも、焼き付けてくださったんでしょう？
与八　おまえさん、何を描こうとしたんだい？
お栄　光を――闇の中の無限の光。
祥吉（声）　旦那さーん！

大門の外から祥吉が、与八の名を呼ばわりながら駆けてくる。

与八　ここだよ。無粋だねぇ、そんな大声で迎えに来る奴がありますか。
祥吉　違うんですよ、旦那さん。大変なんです。

与八　なんだえ？
祥吉　八丁堀の大番屋から使いが来て。渓斎英泉先生が捕まったそうで。
お栄　善次郎が？
祥吉　博奕の咎だそうで。身元引受人に旦那さんの名を出したと。

お栄、咄嗟に駆け出す。

与八　これ、お栄ちゃん！　祥吉、
祥吉　駕籠を待たせてあります。――待ってください！
与八　失礼しますよ。

与八、出て行く。
一人残る滝野、お栄が行った先を見つめ、急ぎ去る。
ゴーンゴーン……浅草寺の明け六ツを告げる鐘の音。
×　×　×
かつての冨士屋、座敷。
北斎、筆を持って現れる。
目の前にある八枚並びの真白な襖。
北斎、心を集中させると筆を振るう。
無作為に飛ばした墨、それをたちどころに繋げ、枝にしていく。
座敷一杯に枝を張り巡らせると、筆を持ち替え、紅梅を描いていく。
やがて見事な紅梅の襖絵が立ち現れ、座敷を染める。

北斎　――しゃらくせえ。（満面の笑み）

思わず迷い込んだ鶯が、ホーホケキョと鳴く。

十二　恋

八丁堀の大番屋。
縄で括られて土間に座らされている善次郎。
髪も着物も乱れ、前夜の惨状が見て取れる。
駆け込んでくるお栄と与八。

お栄　……！
与八　善さんや。派手にまあ……、なにやってんだい。
善次郎　悪ィな。旦那。

与八　もっとてめぇを大事になさいよ！　――八丁堀の旦那。西村屋与八でございます。このたびはとんだご迷惑を……、

与八、座敷の奥に入っていく。

善次郎　なんでおめぇが来ンだよ。
お栄　悪ぃかよ。――ほんと……なにやってんだよ善次郎！
善次郎　うるせぇ。
お栄　手は？　無事かよ？
善次郎　さあな。感覚ねぇや。さんざ踏まれたからな。
お栄　……、
善次郎　何が悔しいってよォ、しこたま勝ったのに巻き上げられちまった。文無しだ。
お栄　莫迦！　金なんて――なんであんたは。
善次郎　……、
お栄　あんたはさ、あんなすげぇ絵描けるのに、なんでてめぇを粗末にすんだよ。あんたの絵見てると、あんたの裡（うち）がわにずぶずぶ入ってくような気がする。そこにはあんたが女たちといて、女たちにてめぇの躰ぜんぶ差し出して喰わしてやがる。あんたの絵にはイマしかねえ。これまでもこれからもねえ、ただこのイマしか。怖ぇよ。
善次郎　……どうでもいいんだ。絵なんてよ。ほかにやることがねぇから。ほんの浮世の手慰みよ。
お栄　何言って、
善次郎　……俺が二本差しだったってのは知ってるか？
お栄　ああ。
善次郎　うちは、元は藤原に繋がる武士だったらしい。けどこの泰平の御世だ、元がどうこう言ったってしょうもねぇほど貧しくてよ、親父の代にはやっとこ食いつないでるようなもんだった。それが、親父もお袋もさっさと逝っちまってよ。俺が家督を継いだのは二〇才になる前だ。でな、終わらせちまった。あっけなく。藤原なんちゃらから続く家をよ。
お栄　――、
善次郎　笑うだろ？　妹が、腹違いもいれて三人いたのを――結局は三人とも芸者にしちまった。あいつら、女が自分を養うにはそれしかねぇって――今も吉原の座敷で三味弾いてら。俺ァよ、どんな顔して生きてりゃいい？　――師匠の家にいた時にはまだマシだった。師匠と一緒になんもかも忘れて絵狂いでいられたけどよ、でもそんなのはマヤカシだ。
お栄　……、

善次郎　池田善次郎はとっくに死んでンのよ。

お栄、善次郎に口付ける。

お栄　だったら、マヤカシのまま生きろよ。マヤカシでも生きて生きて生き抜きゃ、ホントになるよ。……ここにいるおめぇは何だよ！　天下の渓斎英泉がそんなこと言うなよ！　泥水で描くのがてめぇだろ？！

与八、戻ってくる。

与八　お許しが出たよ。帰っていいとさ。（縄を解き）ひでぇ有様だね。ともかくうちの店へ連れてくよ。

与八、善次郎に肩を貸して立たせる。
お栄、与八と善次郎も番屋の外に出てくる。
外で待っていた滝野、来る。

善次郎　お滝……、
滝野　あんた。心配したんだよ。急にいなくなるから。
お栄　――、
与八　知り合いだったのかい？
善次郎　この人は――絵師になる前からの昔なじみでよ。お互い変わっちまったけど師匠の座敷でたまたま会って。妹たちも世話ンなっててよ。そんで師匠の家、出てからは……、
滝野　――、（礼を）
善次郎　旦那。悪イ。店にはまた顔出すよ。

善次郎、滝野の元に歩いて行く。
滝野、善次郎が倒れそうになるところを支え、二人、歩いて行く。

与八　なんだね、もう――祥吉、どこだえ？

与八、祥吉と駕籠を探しに去る。

お栄　……ッ、

お栄、踵を返し数歩。――そして走り出す。

十三　開花

北斎工房。
北斎、蜜柑箱に納めた日蓮像に向かって一心に祈っている。
ぶつぶつと祈るその声は徐々に大きくなる。

北斎　ミョウホウレンゲキョウ、ナムミョウホウレンゲキョウ、南無妙法蓮華経！

おみね　おみね、入ってくる。

おみね　ねえ、北斎さん！　信心もいいけど、もちっと声落としてくんないかねぇ？
北斎　（唱え続ける）
おみね　やめてよ。こっちの気が狂いそうだよ。よしなったら！

お栄、帰ってくる。泣くのを堪え、遮二無二走ってきた。

おみね　お栄ちゃん！　ちょうどよかったよォ。北斎さんが壊れちまったんだよ。
北斎　（唱え続ける）
お栄　うるせぇよ。
北斎　……お栄か、
お栄　どうしたんだよ。
北斎　……俺ァ、もうだめだ……、
お栄　だめって。
北斎　腹が減ってよ、オモテの犬ころ喰おうと思って……絵に描いてから成仏させてやろうと思ったんだよ。なのに――この年になってもまだ犬ころ一匹満足に描けねぇんだよ……。描けねぇんだよう……、
お栄　おやじどの……、何言ってんだよ……、

思わず笑えてくるお栄。めそめそと泣く北斎。

おみね　おかしいよ、二人とも。なんか食べなさい、ね？　作ってやるから。まったく、絵師なんて谷中の不作だね。
北斎　なんだよ。
おみね　生姜ない（しょうがない）よ。

おみね、出ていく。

北斎　……西洋画、描けたのか？
お栄　……もうちっと時間くれ。
北斎　いつまで待てばできる？　十日（とおか）？　二十日（はつか）？　そしたら描けンのか？
お栄　――おとッつぁんは描けたのかよ？
北斎　……畜生。……生きてぇなあ。……俺ァ生きてぇ。
お栄　……、
北斎　これまでもさんざ描いてきたが、取るに足るもんはひとっつもねえ。百歳を過ぎればどうにか、絵に魂が宿るかもしれねえんだよ。畜生。南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。生きてえなあ。百十歳まででいいからよ。
お栄　……、（笑い）

ふたり、ともに西洋画の仕上げに向かう。
（時の経過）
慶賀、来る。

慶賀　こんにちは。川原慶賀でございます。
北斎　おう、川原の。できてるぞ。
慶賀　ありがとうございます！
北斎　オイ。

お栄、風呂敷に包んだ百枚の絵を差し出す。

慶賀　おお……。
北斎　最初に言っておく。俺は、恥を忍んでこれを出す。たとえあと十日時間を貰っても、今の俺に、満足できるものが描けるわけがねえ。だったらせめて、無様を承知で、歯ァ食いしばってこれを出す。この恥を忍んだら、次を描く。
慶賀　そのお言葉、しかと。シーボルト先生から言付かったことがございます。「北斎殿およびご一門の皆様方には、こん短時間でよくぞ注文にお応えくださいました。この度お描きくださいました絵は、まぎれもなく、日本の絵師による初めての西洋画。まずは果敢に挑んでくださった勇気に感謝する。出来映えはどうあれ」、（失言）
北斎　クウッ！
慶賀　こいを。

慶賀、土産を差し出す。

北斎　なんだよこりゃ……、

慶賀　阿蘭陀の遠眼鏡にございます。そん小さか方の穴から覗いてみてくださりませ。

北斎　お――おおお？！　化物！　いや、蜘蛛か？！　反対から覗くと？　ヒヒ、ちっちぇえ！

お栄　おやじどの、客の前だよ。コラ！

北斎　（ゲタゲタ笑い）――いや面白ェな！　どこまで見えるんだ？！

北斎、遠眼鏡を手に出て行く。

お栄　ちょッ、どこ行くんだよ！　おやじどの！（行ってしまった）　……あんたがいけねぇよ。先に出すから。

慶賀　瞬時に夢中になり、あくなき探究へ！　北斎殿の神髄、お見それしました。

お栄　迷惑だよ。

慶賀　改めまして。では。

慶賀、風呂敷包みを解く。中の絵を数枚見る。

お栄　（緊張し）……、

慶賀　――それではシーボルト先生にお届けいたします。お代は、先生に見ていただいたのち、長崎屋からお届けいたします。

慶賀、風呂敷包みを元に戻そうと。

お栄　……どうだった？

慶賀　――おいが言うなんぞ、

お栄　いいから。

慶賀　……失礼ながら、たとえば、こん一枚は北斎殿の手、こちらの一枚はお弟子の方々によるもんでは？

お栄　――、（頷く）

慶賀　やはり北斎殿の方は西洋の構図、陰影の色彩に取り組まるッばかりでなく、そこにご自分の画風も加えようとされとる。新たな画風に挑みながら、絵の面白さも手放すまいと。そいに比べてお弟子の方々は、新しか画法に苦心さ

れるあまり、風情が失われとる。

お栄　……描き直すよ。

慶賀　いえ。シーボルト先生のお言葉、申し上げましたでしょう。出来はどうあれ意義深い。そいに、偉そうに申しましたが、どの絵も無論、おいなんぞは足元にも及びません。さすがは北斎ご一門でございます。長崎屋に戻りましたら、先生と、すべてん絵ば、とっくりと鑑賞させていただきます。

お栄　……うん。

慶賀、包み直そうと――束の中の一枚が目につき、引き出す。

慶賀　こん絵。遊女と禿図……、

お栄　――、

慶賀　……北斎殿の手ではなかですね？

お栄　ああ。……弟子が描いたモンだよ。

慶賀　名のあるお弟子が？

お栄　いいや。名はないさ。

慶賀　――、（じっと見る）

お栄　なんだよ……、

慶賀　こん一枚は、違っとりまするな。

お栄　違う？

慶賀　西洋の画法の陰影――光と影は、見えるままの色彩にございます。ですがこん一枚に描かれた光と影は、まるで心に映る色。心の闇が、光を引き立て、光がまた、闇を包む。――人物の配置は拙い。遠近法もうまいとは言い難い。ばってん――こん絵には何かある。こん先へ向かう何か――、

お栄　――、

慶賀　おいはずっとシーボルト先生のお言葉を鵜呑みにしてきました。海の向こうに広がる国々、そいに比べてこん国はえらくちっぽけだと。こん国の人たちは何も知らず、いずれ海の向こうからの波に呑まれてしまうと。ばってん、北斎殿、そいに門弟の方々。むしろ、こうしてすぐに波ば呑み込んでご自分の力に変えていかれる。踏み出して行かる。こん国は確かにちっぽけで、絵師たちも人々も、ふだんは畳の目を見て暮らしとります。そいばってん、顔を上げた目の高さは海の向こうまでも見渡す。

北斎（声）　オイ！　お栄！　すげえぞ！　遠くが見える！

お栄　どこ登ってんだ？！　おやじどの？！

北斎（声）　うわっ、危ねえ、

慶賀　（笑う）――いずれ目を瞠るとは、海の向こう側の方々かもしれません。

慶賀、絵の風呂敷包みを持つ。

慶賀　そいでは。
お栄　川原さん、
慶賀　はい、
お栄　その……ありがとう。
慶賀　礼はこちらです。ご一門の皆さまによろしゅうお伝えください。
お栄　長崎屋に戻るんなら、おやじどのも連れてってやって。
慶賀　もちろんです。シーボルト先生も喜びます。最後にお女中、ほんに余計な世話ばってん、まちーっと綺麗に、
（塵を投げる）
お栄　失礼します。
慶賀

お栄、深く深呼吸をし、窓の外を見る。
鳥の声。長屋から聞こえる生活の音。差し込んでくる光――。
部屋の塵を寄せる。
真白な紙を一枚広げ、紙の前に正座する。
深く息を吸うと、紙に向かい筆を――。
×　×　×
一陣の風。
どこからともなく舞う桜。
部屋の中、それが暮れたかと思うと、ポツリポツリ星が浮かび、それは次第に空を埋め尽くしていく。
あたりは柔らかな闇に包まれる。闇の中を、女たちが来る。
小さな手燭や雪見灯籠、妓楼の玉菊灯籠……。
闇の中、ほのかな明かりが女たちを照らし出す。
女たちは、短冊に恋を詠おうとするなど、それぞれの想いを抱えて。
栄、描き続ける。闇は深くなり――、
×　×　×

善次郎　お栄。――お栄。

元の座敷。とっくに日は暮れている。
そこには善次郎が居る。

お栄　――善次郎、
善次郎　おう。開いてたから入っちまった。
お栄　（幻かと）――、
善次郎　なんだよ？
お栄　ううん。……日が暮れてら。
善次郎　相変わらずだな。師匠は？
お栄　じき帰ると思うけど。待ってなよ。おみねさんにお茶、頼んでくるから。
善次郎　いいよ。じゃ、おめぇから伝えといてくれねぇか？
お栄　何？
善次郎　別れをな、言いに来た。
お栄　……え？
善次郎　今度、四谷の方に越すからさ。ちょくちょく顔出せなくなるから。
お栄　どうして。
善次郎　妓楼を開こうと思ってな。
お栄　あんたが妓楼を？
善次郎　そ。忘八になンのよ。
お栄　嘘。
善次郎　（笑う）似合いすぎだろ？　妹らの旦那と組んで、やってみようかってな。若竹楼っつうんだ。芸者は妹たちを呼び寄せてよ。
お栄　――お滝さんも行くの？
善次郎　まあな。
お栄　絵は？
善次郎　どうだろうな。これまでのようにはいかねえが。ま、描くさ。
お栄　描き続けてくれるなら、それでいいよ。
善次郎　今度会うときは、おめぇの方が有名になってるかもしれねえな。女北斎なんて呼ばれてよ、偉そうに師匠風吹かすかもしれねえ。
お栄　んなわけあるかよ。
善次郎　――おめぇの描く色は、やっぱりいいなァ。光と影がどっちもあって、より合わさって色を深めてる。この色に、おめぇが息づいてる……。
お栄　――、
善次郎　仕上がりが楽しみだ。そんじゃ。
お栄　もう行くの？
善次郎　ああ。師匠によろしく。
お栄　――善次郎！　……あのさ、あたし……欲があるんだ。どうしようもねぇ欲。この色は、その欲を描こうとした。こんなの言ったら仕舞いだけど、でも、この色の深さを知りてぇから言うよ。

善次郎　言ってみな。
お栄　あんたが欲しい。
善次郎　――でもおまえは、他の男のモンだろう？
お栄　誰。
善次郎　北斎。
お栄　……描こう。二人で。朝が来るまで。
善次郎　おう。

お栄と善次郎、絵筆を持って出ていく。
残された一枚の絵、月光に光る。
北斎、長崎屋から機嫌良く戻ってくる。

北斎　帰ったぞ。……なんだよ。いねぇのか？

お栄が残した絵を見つける。

北斎　（まじまじと見て）――、

十四　西瓜

翌日。文月（七月）最後の昼近く。
長屋にある共同の井戸端。日射しが明るく輝いてる。
おみね、水を汲みに来る。

おみね　――、（ふう）
小兎　おみねさん！

小兎、風呂敷に西瓜を包んで持ってくる。

おみね　あら、こんにちは。
小兎　こないだは、旦那に食べさせてくれてどうも。これ、お返し。
おみね　西瓜！？
小兎　いただいたんだよ。せっかくだから長屋の皆さんで。
おみね　こんな立派な。悪いよォ。
小兎　世話になってるから、
おみね　そんな、世話なんて。してるね。じゃ遠慮なく。――あんたァ西瓜いただいたよォ！

おみね、西瓜を抱えて部屋へ入っていく。
こと、北斎工房へ。
工房の中では、北斎が描いていた途中で眠っている。

小兎　おまえさん、またそんな恰好で。
北斎　（目覚め）……ん、――朝か……、
小兎　無理して。もう若くないんだよ。――それにしても酷いね。足の踏み場もないじゃないか。暑くなってきたし……虫が湧くよ。
北斎　んじゃ、そろそろ潮かもな。家移りするか。
小兎　また越すの？　ここは親切な人が多いじゃないか？
北斎　明日にでも移り先、探してくらァ。
小兎　……そんならさ、帰ってきたらどうだい？　家ならあるんだから。一緒に暮らそうよ。
北斎　――。
小兎　言ってみただけさ。――お栄も離縁されてよかったよ。やっぱり絵師なんかに嫁がせるもんじゃないね。今度はもっといい縁談を、
北斎　まだ懲りねえか？
小兎　あたりまえだろ？　だって……あんたもあたしも、あの子より先に死んじまうんだよ？
北斎　分かるがよ……、

北斎、お栄が描いた絵を小兎に見せる。

小兎　――これを、あの子が描いたの？
北斎　おう。
小兎　もう――だから言ったじゃないのさ……、人生、狂っちまうって。
北斎　へっ。（笑う）

お栄、工房に帰ってくる。風呂敷包みを持ち、紅梅の簪を挿した姿。

小兎　お栄――、
お栄　おっかさん、来てたんだね。
小兎　……西瓜持ってきたんだよ。食べる？
お栄　うん。今年初めてだ。
小兎　そうかい。おまえさんも食うだろ？

北斎　ああ。
小兎　じゃ、おみねさん手伝って来ようかねぇ。

小兎、出ていく。

お栄　ただいま。
北斎　おう。
お栄　ずっと描いてたの？
北斎　これとそっちのワ印。与八が来るから包んどいてくれ。
お栄　うん。……あのさ、あたしも描いたんだ。
北斎　アア？　ワ印か？
お栄　真似じゃないよ、今度は。

お栄、持って帰ってきた風呂敷包みを解く。
北斎、絵の前に改まる。お栄、緊張の面持ちで見つめる。

北斎　設定は――町娘と侍か。
お栄　うん。
北斎　……のびのびしてらぁ。墨線が細いな。俺の線じゃねえ。
お栄　できるだけ細やかにしたいと思ったんだ。着物の柄も、櫛の模様も。
北斎　躰もよく描けてる。なにより女の顔――満ち足りてるのがいい。
お栄　ん。
北斎　こっちの男は……なんだかよ、この筆跡、見覚えあらあな？
お栄　（笑う）
北斎　分かってるよな、お栄？　あいつはおめぇのモンにはなっちゃくれねえよ？
お栄　いいんだよ。そのかわり、あたしも、誰のモンにもならねえ。
北斎　――よし。続けて描いてみろ。与八から「多満普求梨」の次の注文が来てる。
お栄　錦絵、十二枚組。これも入れてやる。
北斎　本当に？！
お栄　俺の画号入れとけ。「北斎改メ為一」ってな。
北斎　え、画号変えるの？　いいけどさ。
お栄　それから――これは何だ？

北斎、お栄が残していった一枚を取り上げる。

お栄　その絵――あたしの、……なんていうか、ただ描きたくって。

北斎　この美人画。気に喰わねぇな。なんか言いたげにしやがって。
お栄　――、
北斎　画号入れろ。お栄。
お栄　いいの……？
北斎　ああ。
お栄　こっちも「北斎改メ為一」でいい？
北斎　俺の名じゃねえ。おめぇの画号を。
お栄　――、
北斎　野垂れ死ぬ覚悟はできてるな？
お栄　ああ。あたしだって筆一本ありゃ生きていけるさ。
北斎　……、

北斎、工房から出ていく。
お栄、工房に一人残り、自分が描いた美人画に触れる。

北斎・栄　（それぞれに空を仰ぎ）――、

工房の外の井戸端。
辰、西瓜の皮を剥いたものを持ってくる。軒に吊るす。

北斎　それ、なんだ？
辰　西瓜の皮だよ。
北斎　向こう側が透けてやがる。カゲロウみてぇだ。あんたが剥いたのか？
辰　おお。こうやって干してな、乾いたら切って、きんぴらにすンのよ。
北斎　……凄ぇな。凄ぇもんだな。
辰　たいしたことねえよ？　ちっと包丁使えりゃ誰だって、
北斎　いや、この色。この質感。……なんでこんな色かねぇ。しゃらくせぇじゃねえか――オイ、紙と筆。オーイ！
辰　へっ。（笑う）

十五　画号

葉月（八月）、夏の盛りの午前中。
賑わう橋上。鮮やかな日射しの元、行き交う人々。
お栄、橋の上を来る。人々を生写ししようと――。

等明　お栄？

そこには若旦那風の等明の姿。

お栄　等明、さん。……久しぶり。
等明　ああ。（栄の帳面と筆）――変わらねぇな。
お栄　――あんたは変わったね。立派なナリして。
等明　客周りの途中だからよ。やめたんだ。俺ァ。筆は捨てた。
お栄　――そう、……あたし、
等明　いい。お互い様だ。
お栄　……うん。
等明　あの夜のことをな、時々思い出すよ。俺たちの最初の夜。暗闇ん中で駆けてくおめぇの足が――足の裏が妙に白くよ、焼きついて。なんであの時、おめぇと一緒にいかなかったか――走ったら何か変わってたのか。……道は元々、違ってたのよ。
お栄　でもあたしは、あんたに会えて知ったんだ。テメェが女なんだって。
等明　なんだそれ？　じゃ、女絵師さんよ。せいぜい腕上げて、いつかうちの店に絵看板でも描いてくれ。「葛飾北斎」ってな。
お栄　やだよ。描くんなら、あたしの画号で。
等明　おめぇの画号？　なんて？
お栄　オーイ。
等明　犬猫でも呼ぶみてぇだな？　オーイ。
お栄　為一に応えるって書く。おとッつぁんが呼んであたしが応える。「葛飾応為」。そういう名だよ。
等明　そうやって一生親父に縛られてりゃいい。
お栄　縛られねえよ。背中見てるつもりもねえ。ただ生きてくだけさ。
等明　ふん。じゃあな。
お栄　おう。じゃあ。

等明、去る。
お栄、空を見上げる。夏の初めの入道雲。
お栄、紙と筆を取り出し、挑むように世界を見渡す。
橋上にあふれる人々の姿を、川面の反射が彩っていく。

〈了〉